



全国公害研協議会活動への夢と期待

全国公害研協議会 顧問

第七代会長 渡辺 弘

(元 兵庫県立公害研究所長)

全国公害研協議会の結成20周年記念特集号発刊に際し、協議会が結成以来多くの苦難を乗り越えて、掛替えのない貴重な環境保全研究者集団として成長してこられたことを、会員OBとして心からお慶び申し上げます。私の夢を述べさせていただいてご挨拶といたします。

よく言われることですが、長靴をはいて、年月を追って地域の環境を観察することなくしては、環境保全研究はその真相に迫ることはできません。その実行は本協議会会員に全国の市民から信託された任務でしょう。その意味においても、成長した多くの研究歴10～20年会員は協議会の貴重な宝です。一方において、環境保全研究は科学と文化の両面からの検討なくしては、説得力のある成果は得られないとする声が大きくなりつつあります。地球規模の環境破壊が進行する現状において、西欧的合理的理性に頼るのみで、自然環境との融和を欲求するアジア的環境文化の心の深層に触れた共感を得ることなくしては、地球レベルの環境保全は成功しないでしょう。和魂洋才は21世紀への環境保全においても大きな課題です。

会誌の報告論文の主流には、科学的解析に洞察は同席さすべきものでないとする科学方法論へのしきたりと、環境保全の文化的価値論は専門外であり、市民の公害苦情を誘導する恐れありとする思いすごしがあって、文化的な環境インパクトの洞察はタブー視される傾向があります。一般社会においても、環境保全に関する科学的・人文的両分野の交流は他人行儀であり、血の通ったものになっていません。環境保全は科学技術用語に終わっています。科学的環境インパクトの実態とともに、それに対する地域住民のライフスタイルとしての受けとめかたを、一人の観察者の頭と目と肌で洞察する評価を積みかさねることによって、環境保全は文化として、世界の市民の心に定着していくことでしょう。本協議会の研究者集団はその担い手として期待される得難い存在です。その芽を育てる場合は、この会誌の他には求められないでしょう。

舌足らずの夢の話になりました。私たちOBの懇談の場がその中に設けられる願いも込められています。全国公害研協議会とその会誌のますますの発展を祈念してご挨拶を終わります。

(会長在任期間：昭和56年6月～昭和60年3月)